

保育の中の物語 (1)

綱渡り、大成功

岸井慶子

ある寒い日、四歳のA男がジャンゲルジムの上で勢いよく片手を上に突き出し叫ぶ。「やったー!」。雄叫びを思わせるその叫びは「宣言」である。苦労して苦労して最後にたどりついたゴールでの勝利宣言だ。

多分、その日は自分で決意して渡り始めたのだろう。慎重に、慎重に、少しずつ、小さな滑り台の上からジャンゲルジムに向かって綱を渡り始めた。腕を大きく開いて上部の綱を握りしめ、下部の不安定な綱から落ちないようにバランスを取る。わずか数メートルの距離だが、上下の綱は別々に揺れるので簡単には進めない。力を込めたその両腕、強く綱を握り締めた拳、落ちまいとして必死に突っ張る両足。しばらく無言の格闘が続いた。



中ほど過ぎたとき、突然「頑張るぞ、頑張るぞ、揺れても落ちないように頑張るぞ」と繰り返す声が聞こえるようになった。なぜ、急に声を出すようになったのか不可解だった。しかし、後でビデオを見直すと、一人の女の子が近くにやってきてA男の様子をじっと見ている。そうか、A男は彼女のことを気づき意識したのだろう。女の子が来るまでは、きつと心の中で自分を励ましていたに違いない。頑張る気持ちは女の子が来る前からあったのだろうが、その気持ちは相手がいることによつて声になり表現になるのだ。誰かがいることはいいことだなあ。

困難は突然起きた。スタート地点にいる一人の男児が綱を揺らし始めたのだ。A男は揺れる綱から落ちまいとしながら「揺らさないで！ 揺らさないで！」と、大きな声でその男児に向かって何度也叫ぶ。しかし、相手は笑みさえ浮かべて揺らすことをやめようとしなない。なおもA男は「やめて。揺らさないで」と必死の形相で叫ぶ。その必死さ、必死さを隠そうとしなない正直さに惹きつけられる。綱の揺れは止まった。

揺らした側の男児にしてみれば、「揺れても頑張るぞ」と言っていたのだから「そうかい。それなら、揺らしてあげようか。おもしろいだろう？ ほらほら……」程度の軽い気持ちだったのではないだろうか。A男を振り落とすほど

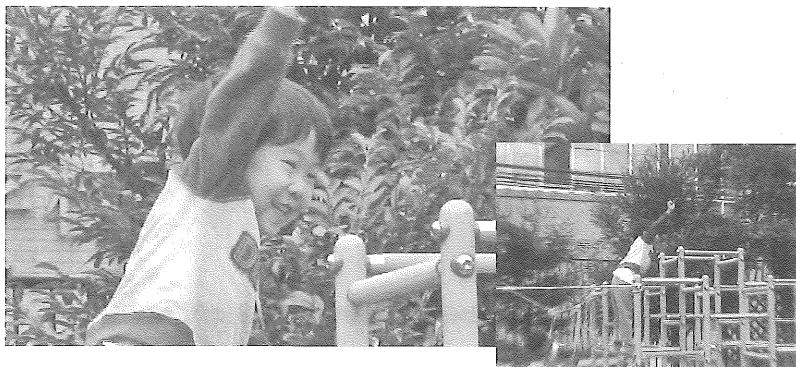


の荒い揺らし方には見えなかった。

そのほかにも小さな困難はあった。たとえば、綱渡りの途中には両足で立ち一息つけるビールケースが置いてあったのだが、隣で遊んでいた女兒たちがさっさと運んでいってしまった。

喜びの瞬間、彼の視線の先には、少し離れた砂場でほかの幼児とかわわっている担任がいる。やはり、うれしい瞬間を伝えたいのは「担任」なのだ。この場面をビデオで詳細に観ていくと、A男が到着点であるジャングルジムに足を掛けようとする瞬間、つまり、成功を確信したであろうそのときにはもうA男の視線は担任のいる方向に向かっていることがわかる。成功してから担任を探しているのではなく、成功を確信したときには誰に伝えようか心は決まっているようだ。担任はもちろん視線を笑顔で受け止め、A男の喜びを共感した。

保育の中に、生まれては消えるたくさんの物語がある。それらは互いに交差し、影響を与えながら大きな物語をつくっていく。たとえばこの日、綱のこちらをアメリカ、到着点をオーストラリアと名付けて世界旅行のイメージを綱渡りに残していった女兒たち。偶然通りがかり立ち止まって見ていた女兒は、A男の気持ちを声に表現させた。綱を揺らした男児の存在も、最後の「大成功」には欠かせない。すぐ隣では、手作りブランコに腰かけようと試行錯誤する男児、それ



を手伝う女兒がいる。砂場では山作りに雇われたアルバイト数人に給料を払う社長さんがいる。A男を見ていたB男は、やはりその日初めて綱を渡った。そして、しきりに自分の手のひらを眺めては腰のあたりに何度もこすりつけていた。きつとあんなに力を込めて物を握った経験がなかったのではないだろうか。

この様子は、綱渡りの遊びが一段落した（と思える）時間に起きている。多くの幼児がたくさん参加し、そこはそこで充実した子どもの世界やドラマがある。しかし、誰もいなくなるまで、じっと機会を待っている幼児もいる。参加人数や表面的な活気に惑わされてはならない。おずおずと参加してくる子どももの内面に、熱い思いを感じる場合が多いのだ。

自分でやり始めて、苦勞して、やり遂げた。達成感とか満足感と一口でいうにはもったいないほどの心の経験だ。このような瞬間の積み重ねが、心を育てていくのだと感じさせられた。

（鎌倉女子大学短期大学部）

*ビデオによる保育観察とビデオカンファレンスを続けてきました。その中で子どもの「すこさ」に魅了され、私自身が育てられています。今まで撮らせてくださった先生方や子どもたちへの感謝をこめて、今月から保育観察を通して見つけた子どもたちそれぞれの忘れられない物語を書かせていただきます。